

訪探市吹笛

第51回

笛吹市の史跡⑩ 甲斐国分寺・金堂跡

今回の笛吹市探訪では、平成20年12月から平成21年4月にかけて行った甲斐国分寺金堂(かいこくぶんじこんどう)跡の発掘調査について紹介します。

国分寺は、今から約1250年前の天平(てんぴょう)13年(西暦741年)に、聖武(しよむ)天皇が国情不安を収めるため、各国に建立を命じた寺院で、当時、甲斐国(かいのくに)と呼ばれていた山梨県では、一宮町国分地内に造られました。



発掘調査で出土したかわら

今回発掘調査を行った金堂は、国分寺の中でも本尊(ほんぞん)を安置した中心的な建物です。

発掘調査では、金堂の柱を支えていた礎石(そせき)を3個確認することができました。これらの礎石は、直径1メートル40センチを超える大きさがあり、壮大な建造物である金堂を支えるのにふさわしいものです。

また、金堂を建てるために造成した基壇(きだん)、土を盛り上げて突き固めて造った地盤(ぢばん)外周には石積みが行われ、その基礎にあたる地覆石(じふくいし)が東側と南側、北側に残っていました。

これらの地覆石から基壇の規模をみると、南北の長さは22・6メートルであることが分かりました。

東西の長さについては、基壇の東側で確認された地覆石と金堂の北側にある講堂(こうどう)の礎石の状況から推測すると、36メートルであると考えられます。

さらに、金堂に上がるための階段が設置されていた所も見つかりました。幅は9・6メートルあると考えられます。

今回の発掘調査では、金堂の前面と裏側に石が敷き詰められた石敷い(いしじき)も見つかっています。石敷の幅は、階段の正面付近を除くと約3メートルあり、雨だれで地面がくぼむのを防ぐ軒下(のきした)の石



発見された石敷と地覆石

の機能も兼ねていたのかもしれませんが。以上のように、発掘調査では多くの発見がありました。しかし、まだ、分からない点も多く残されています。

今後は、金堂に取り付く回廊(かいろう)の調査や金堂の礎石がどこに据えられているのかなど、金堂の規模や構造を詳細に確認する調査を行っていきます。その成果については、改めて報告させていただきます。